

長野県下伊那郡下栗地区における植物利用の一側面¹⁾

原 真 由 子

An Aspect of the Folk Botany in Shimoguri, Shimoina
District, Nagano Prefecture

Hara Mayuko

Abstract

This paper reports on an aspect of the utilization of natural environment of Shimoguri village, Nagano Prefecture, one of the highest mountain communities in Japan.

A pragmatic aspect of Shimoguri folk botany, i.e., usage of tree-type plants, is described based on the data collected by field researches in 1996 and 1997.

Vegetation around the Shimoguri village is also surveyed from the phytosociological perspective in order to provide information on the ecological basis for traditional plant utilization in this area.

A special attention is paid to one of the universal usages of plants “fire-wood”.

はじめに

1.1 目的

本稿は、長野県下伊那郡上村下栗地区における木の利用を明らかにして、下栗の人々の木の利用法とそれを支える民俗的知識がどう関係しているかを理解することを目的とする。以下では、2回の現地調査（2.1, 3.1で詳述する）の結果に基づき、伝統的な木の利用の資源的な基盤となる下栗の林がどのような植生であるかを植物社会学的に明らかにし、そして1940年から1960年当時の下栗の林でどのような木を採取し、それをどのような理由で、どのような用途に、どの程度の頻度で用いていたかを明らかにする。

1.2 対象となる共時態

本稿で扱う「木の利用」は、1940年頃から1960年頃までになされていたものとする。この時代を選んだ理由は、下栗地区にプロパンガスが導入される以前の時代の木の利用を扱うため

ある。なぜプロパンガスが導入される以前の時代の木の利用を扱うのか。それは次のような理由による。一般的に木には燃料、用材などいろいろな用途がある。その中で燃料としての利用は他の利用と異なる点がある。それは、繰り返し利用できるものではなく、一度使ったらなくなるということである。そのため常に供給が必要であり、他の利用法にくらべて木の消費の量が圧倒的に多い。したがって、プロパンガスの普及とともに木の利用の全体像は劇的な変化を被ったと考えられる。プロパンガス導入以前のこの時代を扱うことは、木の伝統的な利用とそれと密接に関わる民俗的知識を知るには適している。

1960年は下栗にプロパンガスが導入された頃と考えられる。このことはインフォーマントに対するインタビューと1つの文献に裏付けられている。インフォーマントによるとプロパンガスの利用は昭和35（1960）年頃始まった。文献によると、遠山地方全体でみてもプロパンガスの使用が始まったのは昭和32（1957）年である（後藤 1995：324-325）。

次に、なぜ1940年頃を扱う時代の開始時にしたかは、次のような理由のためである。すべてのインフォーマントが自分が15～16歳だった頃までさかのぼって話をして下さったが、その中で最も年齢の高い山崎氏（1924年生まれ）が15～16歳であったのが1940年頃であるため、本稿が対象とする年代の開始は1940年以降と判断できる。

したがって、本稿が対象とする年代は1940年頃から1960年頃までである。

1.3 本稿で扱う「木」の範疇と「利用」の種類

本稿で扱う「木」とは、下栗の人々が日常で用いている「木」という方言語彙が表す民俗範疇である。そのため、共通語の「木」が示す植物とは一致しない場合もある（3.2を参照）。

ここで扱う「利用」とは主に幹、枝、根という部位を対象とした利用に限定する。果実・種子や花を対象とする食用、観賞用の利用法は扱わない。

2 下栗の植生

2.1 植生に関する調査方法

筆者は、下栗の人々が採取可能な範囲にどのような植生が存在するかを知るために、1997年6月18日～22日の5日間、長野県下伊那郡上村下栗において、植物学者である浅野一男氏の指導のもとで、地元でマルヤマと呼ばれる林および異なる2地点の林の直接観察を行った。調査地点は表1の通りである。

表1：調査地点とその標高

	調査地点	標高
1	マルヤマ	標高 1050 m
2	ミズナラ林 1	標高 1240 m
3	ミズナラ林 2	標高 1080 m

1つはマルヤマであり、他の2地点はミズナラ林である。その2地点を本稿では便宜的にミズ

ナラ林1, ミズナラ林2と呼ぶ。これらの地点（スタンド）の選択は、下栗の林の代表的な相観はミズナラ林であるという植物学者浅野氏の同定に基づいてなされている。

以上の3地点で、15m×15mの面積区画に見られる組成種を網羅的に浅野氏に同定してもらい（付録Iにその一覧をあげた）、その中で出現の割合の高い種の本数を数え上げた。本章であげる種名はすべて標準和名である。

2.2 マルヤマ

マルヤマは、浅野氏によると、モミツガ林とモミクリ林の2つのタイプの相観から構成されている林である。2.1で述べた直接観察において、マルヤマの林を構成する組成種を見たところ、その中にツガーコカンスゲ群集の標徴種であるツガ、コカンスゲ（スゲ sp.²⁾）、モミ、クリ、コアジサイ、リョウブが認められた。したがって、マルヤマはツガーコカンスゲ群集であると考えられる。

さて、マルヤマ全体の植生は、ツガーコカンスゲ群集であると考えられるが、相観的にはモミツガ林とモミクリ林という2つの林に分けられる。ここで、この相観の違いをもたらし理由について考えてみよう。

モミクリ林は、マルヤマの東斜面の一部分に存在し、他の大部分はモミツガ林である。2つの林の組成種を比較すると、共通種はもちろん多いが、出現する頻度が高い種に違いが見られる。2つの林の出現率の高い種を比較したものが表2である。

表2：マルヤマにおける出現率の高い種
括弧内の数字は225m²内に出現した木の本数である。

モミツガ林	モミクリ林
ウラジロモミ (24)	モミ (29)
ヒノキ (6)	クリ (24)
クリ (5)	
ツガ (5)	

表2に示すように、モミツガ林に多く見られた種とその本数（以下括弧内に示す）は、ウラジロモミ(24)であり、一方、モミクリ林には、モミ(29)、クリ(24)が多く認められた。

これらの数字から推測できるのは、マルヤマの東斜面の一部分で、クリが特に選んで保護・植林され、ウラジロモミやツガなどの他の木が間引かれただろうこと、そして、その結果クリと同じ高木層にあるウラジロモミが成長せず、亜高木層のモミが増えることによって、モミツガ林がモミクリ林に変化しただろうということである。

クリは、5.2で述べるように、非常に用途が多く³⁾、かつ積極的な利用がなされている場合が多い。特に積極的な利用がなされているのは、そのうちくぎ（杭）⁴⁾、柱、土台、屋根板である。さらに、本稿では扱わない用途であるが、食用にも積極的に用いられていたことが、インフォーマントへの聞き取りによってわかっている。

クリの利用に関してインタビューしたインフォーマントは、野牧年甫さん（昭和12年生まれ）、久保敷勇嘉子さん（大正2年生まれ）、久保敷武春さん（昭和7年生まれ）の3人である。この3人が共通して述べているのは、自分の持ち山に「クリ山」とみずからが呼ぶ林があったということである。3人のコメントは、おおよそ次のように要約することができる。すなわち、「クリ山」は、クリの実を食用とするためにクリ以外の種を間引き、クリをさらに植えるなどの手入れをしていたのである⁵⁾。

マルヤマの一部がモミクリ林に変化した背景には、このようなクリを保護するという人為的な関与が加わったことがあると考えられる。

2.3 ミズナラ林

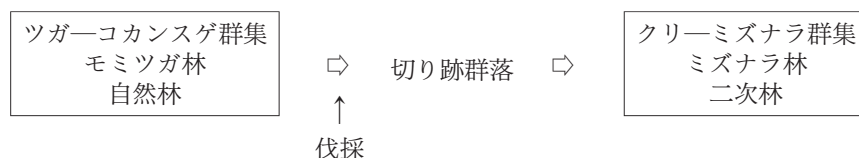
2.1で述べたように、2つの地点（スタンド）でミズナラ林（ミズナラ林1、ミズナラ林2）の組成種を植物学者の浅野氏に同定していただいた。それぞれの組成種の中にクリーミズナラ群集の標徴種⁶⁾であるミズナラ、クリ、ヤマウルシ、アオハダが見られるので、浅野氏によると、この2つの林は植物社会学的にクリーミズナラ群集である。この2地点における植物社会学的群集の同定によって、下栗においてミズナラ林の相観を持つ林は、クリーミズナラ群集であると結論できる。

2.4 植生遷移

このように、マルヤマと2つのミズナラ林の植生は異なっている。マルヤマはツガーコカンズゲ群集に属する植生を持つ自然林であり、2つのミズナラ林はクリーミズナラ群集に属する植生を持つ林である。ここでは、植生遷移という側面から、マルヤマとミズナラ林はどのような関係なのかを考察したい。

直接観察した3つの林の標高はそれぞれ、マルヤマ [1050m]、ミズナラ林 [1240m]、ミズナラ林 [1080m] である。したがって、これらの林は、伊那谷の植生の垂直分布における山地帯（標高1000～1600m）（浅野・伊知地 1987：26）に属している。山地帯森林植生における植生遷移は、どのように進行するのだろうか。図1は、その流れをわかりやすく示したものである。

図1：山地帯森林植生における植生遷移（宮脇（1967：276）をもとに筆者作成）



宮脇（1967：276）によると、中国地方から東北地方のミズナラ—ブナクラス域（落葉広葉樹林帯）では、森林伐採後の放任地には、切り跡群落を経て、クリーミズナラ群集を標徴する樹種が見られる二次林が生育している。すなわち、山地帯の自然林は、伐採などの人為的影響を

受けた場合、クリーミズナラ群集という二次林に変化するのである。このような山地帯（落葉広葉樹林帯）に見られる一般的な森林植物社会の遷移をふまえると、直接観察したミズナラ林は、ミズナラ・ブナクラス域（落葉広葉樹林帯）の代表的二次林であり、ミズナラ林の原植生はモミツガ林であると考えられる。すなわち、たとえば薪炭材を得るために自然林であったモミツガ林は伐採が行われ、その代償植生としてミズナラ林が生育したと考えられるのである。

また、伊那谷にある天龍村、浪合村においても、ミズナラ林は「山地帯を代表する森林で、多くは薪炭材などの目的で伐採更新が繰り返されてきた二次林で、ツガ林やブナ林の代償植生」（浅野 1992：68）、（浅野 1991：19）であることから、伊那谷の山地帯一帯でミズナラ林が広がっていることがわかる。

したがって、モミツガ林である自然林マルヤマは、ミズナラ林へ遷移する前の段階を保っていると言えるだろう。

では、なぜマルヤマは原植生を保ち、ミズナラ林に遷移していないのかという疑問が生じる。この問題は、マルヤマの所有権に関連する社会的理由に説明を求めることができる。インフォーマントの野牧源吾氏は、マルヤマは4人の所有者が存在する林であり、境界線を判断するのも難しいと言う。このように、マルヤマは複数の人々に所有されているために、この地域で進んだと思われる伐採の手が加わりにくかったと推測できる。

3 マルヤマにある木とその方名

前章で、山地帯における典型的な自然林であるマルヤマと、下栗で代表的な相観であるミズナラ林の植物社会学的な植生を明らかにした。本章以降では、そのような植生の環境の中で、1940年から1960年当時下栗の人々がどのように木を利用していったかを明らかにしていくが、今のところ明らかになっているのは、1996年に観察することができたマルヤマの47種の木の利用に関してのみである。マルヤマは1960年頃までには多く見られた植生がほぼ当時の姿を保っている林であり、当時そのような林で木を採取し利用していたことはインフォーマントが一致して認めていることから、マルヤマは当時利用されていた木の種類を明らかにする対象として適している。もちろん、下栗の代表的な相観であるミズナラ林に観察される木の利用についても調査する必要があり、これは今後の課題とする。本章では1996年に行った木の利用に関する調査の方法・内容を述べ、そしてマルヤマの木の方名を記述する。

3.1 木の利用に関する調査方法

筆者は1996年7月18日～24日の7日間、下栗において木の利用に関する調査を行った。そこで得たデータは、期間中下栗に残っている唯一の典型的な自然林であるマルヤマにおける木の直接観察と4人のインフォーマントに対するインタビューによって得られたものである。またインタビュー中に木を利用したいいくつかの道具を見る機会も得られた。

インタビューには以下の4人の方がインフォーマントとして協力して下さった。名前はインタビューを行った順に並べた。

- | | | |
|---|--------|---------------|
| 1 | 山崎許信氏 | 下栗出身，1924年生まれ |
| 2 | 野牧源吾氏 | 下栗出身，1921年生まれ |
| 3 | 久保敷信子氏 | 下栗出身，1938年生まれ |
| 4 | 野牧年甫氏 | 下栗出身，1937年生まれ |

インタビューの方法はインフォーマントごとに少し異なるので以下で個別的に述べる。木の利用方法に関する質問内容は、燃料としての利用に焦点をあてた。その理由については4.2で述べることにする。

1 山崎許信氏

道具あるいは燃料として利用する「木」について、木の方名、利用方法、利用する理由を質問した。道具のうち箕、槌、自在鉤、いろりは実際に構造を見ながら同様の質問をした。箕はそれに加えて、使用法の再現も見ることができた。

2 野牧源吾氏

マルヤマをいっしょに歩いていただき、そこに生育する「木」を可能な限り網羅的に方名で同定していただいた。それぞれの木の標準和名による同定は、同行して下さった植物学者、浅野一男氏にお願いした。そしてこの木を燃料に利用するか、燃料以外に何に利用するか、利用する理由、利用しない理由は何かという質問をした。

源吾氏の同定による木の方名と浅野氏の同定による標準和名の対照リストを作成し、久保敷氏と年甫氏にはそのリストをもとにインタビューを行った。また、マルヤマにはなかったが、当時利用していた「木」の方名をインフォーマントとのインタビューから聞くことができた。これらの「木」は、浅野氏が方名から標準和名の同定を行った後、インフォーマントに『伊那谷の植物』（浅野・伊知地 1987）の写真を見てもらい確認してもらった。

3 久保敷信子氏

上で述べたリストに並べた方名をあげ、源吾氏の場合と同様に「……（方名）を燃料に利用するか」、「燃料以外に何に利用するか」、「利用する理由、利用しない理由は何か」という質問に答えてもらった（源吾氏から方名を得られなかったものは除く）。

4 野牧年甫氏

マルヤマで源吾氏が名前がわからないといった木の標本を見せ、「下栗でこの木の名前はなんといいますか」という質問に答えてもらった。この質問によって新たに得られた方名と前述のリストにある方名をあげ、「……（方名）を燃料に利用するか」、「燃料以外に何に利用するか」、「利用する理由、利用しない理由は何か」という質問に答えてもらった。

表3：マルヤマの「木」のリスト

	方名	科名	標準和名	標本番号
1.	アオジ	カエデ科	ウリハダカエデ	
2.	アオダコ	モクセイ科	ケアオダモ	TUFS 12
3.	ウシゴロシ	バラ科	カマツカ(ウシゴロシ)	TUFS 6
4.	ウスノキ	ツツジ科	ウスノキ	TUFS 8
5.	オトコヨウドメ・オトコヨウゾメ	スイカズラ科	ミヤマガマズミ	
6.	カエデ	カエデ科	ウラゲエンコウカエデ	
7.	カシオシミ・アカンボウ	ツツジ科	ネジキ	
8. *	カバノキ	カバノキ科	ウダイカンバ	
9.	キンタマズミ	ツツジ科	ナツハゼ	
10.	クリ	ブナ科	クリ	
11.	クロモンジャ・クロモジ	クスノキ科	クロモジ	
12.	ケンプノキ	クロウメモドキ科	ケケンボナシ	
13.	コダケ	イネ科	ヤダケ	TUFS 16
14.	コハデ	エゴノキ科	エゴノキ	
15.	サルグルミ	カバノキ科	ツノハシバミ	TUFS 5
16. *	サワグルミ	クルミ科	オニグルミ	
17. *	サワラ	ヒノキ科	サワラ	
18.	サンショ	ミカン科	サンショウ	
19.	ジシャ	クスノキ科	ダンコウバイ	TUFS 33
20.	シデ	カバノキ科	アカシデ	
21.	ショヨズ	モチノキ科	ソヨゴ	
22.	スギ	スギ科	スギ	
23.	ズミ	バラ科	ズミ	
24.	ツガ	マツ科	ツガ	
25.	ツツジ	ツツジ科	ツリガネツツジ	
26.	ツツジの系統	ツツジ科	ミツバツツジ	
27.	ナラ	ブナ科	コナラ	TUFS 10
28.	ネズミサシ	ヒノキ科	ネズミサシ	
29. *	ハチコ	イネ科	ハチク	
30.	ヒノキ	ヒノキ科	ヒノキ	
31.	ヒメコ	マツ科	ゴヨウマツ	
32.	ビョウブナ	リョウブ科	リョウブ	
33.	ボウダラ	ウコギ科	ケハリギリ	
34.	マツ	マツ科	アカマツ	
35.	マユミ	ニシキギ科	ツリバナ	TUFS 1
36.	マンサク	マンサク科	マンサク	TUFS 11
37.	ミズナラ	ブナ科	ミズナラ	TUFS 9
38. *	モウソウダケ	イネ科	モウソウチク	
39.	モミ	マツ科	モミ	TUFS 34
40.	モミジ	カエデ科	イロハモミジ	
41.	モミジ	カエデ科	コハウチワカエデ	
42.	モミジ	カエデ科	オオモミジ	
43. *	ヤマブキ	バラ科	ヤマブキ	
44.	ヨウドメ・ヨウゾメ	スイカズラ科	コバノガマズミ	TUFS 3
45.	ヨウドメの系統	スイカズラ科	オトコヨウゾメ	TUFS 2
46.	レンゲツツジ・オニツツジ	ツツジ科	レンゲツツジ	
47.	?	ハイノキ科	タンナサワフタギ	

3.2 マルヤマの木47種とその方名

表3は、調査中得られた方名を五十音順に並べ、科名、標準和名をそれに対応させたものである。またこの47種中、標本を作成したものが13種あり（標本番号は東京外国語大学中川研究室で用いている整理番号である）、信州大学のハーバリウムに保管されている。

データとして得られた木は種（species）のレベルで全部で47種（これ以降、種という場合は、科学的分類における種 species を示す）である。そのうちマルヤマで直接観察できたのは41種である。残りの6種はマルヤマでは観察することができなかったが、インフォーマントからの情報によって当時下栗で入手可能であったと筆者が判断したものである（表中*のついたもの）⁷⁾。43のヤマブキは山崎氏、8のカバノキは久保敷氏、16のサワグルミは久保敷氏、年甫氏、山崎氏、17のサワラは山崎氏、久保敷氏、年甫氏、29のハチコは久保敷氏、38のモウソウダケは山崎氏と久保敷氏による情報である。

インタビューの結果、47種中方名がついている木は44種あった。その44種の方名の知識は、3人のインフォーマントがほぼ共有している。

3人のインフォーマントが方名の知識を共有していない種は10種あった。10種はいずれも方名がついているが、どのように方名の知識が共有されていないかによって、

- (1) インフォーマントによって方名が異なっているもの（4種）、
- (2) 一部のインフォーマントしか方名がわからないもの（6種）

の2つに分けられる。それぞれの内訳は表4と表5の通りである。

表4：インフォーマントによって方名が異なっているもの（4種）

科名・標準和名	源吾氏	久保敷氏・年甫氏
クスノキ科クロモジ	クロモジ	クロモンジャ
スイカズラ科コバノガマズミ	ヨウゾメ	ヨウドメ
スイカズラ科ミヤマガマズミ	オトコヨウゾメ	オトコヨウドメ
ツツジ科ネジキ	アカンボウ	カシオシミ

表5：一部のインフォーマントしか方名がわからないもの（6種）

	方名	科名・標準和名
1 源吾氏がわからなかったもの4種	マユミ ウスノキ ウシゴロシ コハデ	ニシキギ科ツリバナ ツツジ科ウスノキ バラ科カマツカ エゴノキ科エゴノキ
2 久保敷氏がわからなかったもの1種	アオジ	カエデ科ウリハダカエデ
3 源吾氏のみわかったもの1種	サルグルミ	カバノキ科ツノハシバミ

表4と表5に示されるような知識のばらつきには、次にあげるような幾つかの理由が考えられる。

源吾氏は「木」の種類に関しては豊富な知識を持っている人物であると下栗では知られている。その豊富な知識は書物から得たものも含まれていることから、方名でなく、和名で記憶し

ていることが考えられる（表4のクロモジの場合）。

また、「この辺りではそうは言わない」と源吾氏以外のインフォーマントが述べていることから、下栗の方名でなく、別の地域の方名で記憶していたことも考えられる（表4のヨウゾメ、オトコヨウゾメ、アカンボウ、表5の3のサルグルミの場合）。表5の1（マユミ、ウスノキ、ウシゴロシ、コハデ）の4種類は方名は知らなかったが、どの用途に適しているかという知識は持っていた。

久保敷氏は、「名前はわかるけど、どんな木がよくわからない。男の人は山仕事をするからよく知ってるけど、女だから……」と言い、用途を我々が訊いてもわからないことが度々あった。また、表5の2のアオジ、表5の3のサルグルミも「女だからわからない」と答えている。久保敷氏は「木」に関する知識は男女の差があると考えており、これも知識のばらつきの理由の1つと考えることができる。

3.3 方名から見る下栗の人々の民俗的知識の一側面

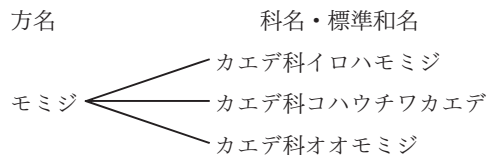
前節では、データとして得られた木の47種中44種に方名がつけられており、その方名はインフォーマントがほぼ共有していることがわかった。

この節では、方名と標準和名を比較し、両者の分類のずれを見ることによって、下栗の人々独自の木の認識の仕方を明らかにしたい。方名に注目するのは、その分類の仕方が彼らの木に対する認識の仕方を一部反映しているだろうからである。

ほとんどは1つの種に対し、1つの方名が対応しているが、複数の種に同一の方名がついているものや、個別的な方名がつけられていないものが2種あった。

まず、複数の種に同一の方名がついている場合が1例あった。図2に示したように、3種に同一の方名がつけられており、それはいずれも「モミジ」という方名で呼ばれていた。その3種は、カエデ科のイロハモミジ、コハウチワカエデ、オオモミジである。この3種に対して1つの方名しかないという事実は、この3種を下栗の民俗的分類では単一の範疇である「モミジ」と認識していることを示唆している。

図2：方名「モミジ」と標準和名との対応



次に、呼び名はあるが、民俗的種のレベルで個別的な方名がない例を取り上げる。その例は、次の2種である。

ツツジ科ミツバツツジ（「ツツジの系統」）

スイカズラ科スイカズラ（「ヨウドメの系統」）

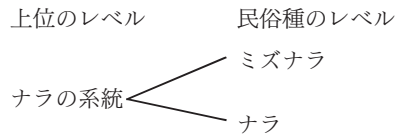
これら2種は下栗の民俗的種のレベルで個別的な名前がつけられていないが、3人のインフォ

ーマントが括弧内の表現を共有していた。

上の2種の「～の系統」という表現について最終的な結論をするにはまだ十分な調査がなされていないが、「～の系統」の表現は方名とどのような関係にあるのか、この表現で呼ばれるものには何があり得るのか、ここで分析を試みる。なぜなら、個別的な方名はなくとも、何らかの方法で表現が共有されていることから、方名に準ずるものとして論じるべきだと考えられるからである。

「～の系統」という表現は方名がつけられていない場合だけでなく、方名がある場合にも頻繁に用いられる。インタビュー中に得られた「ミズナラはナラの系統だから……」という言い方がその一例である。ナラ、ミズナラという個別の方名と「ナラの系統」という表現の関係を表したものが図3である。

図3：「ナラの系統」と個別の方名



つまり、「～の系統」という表現は複数の個別の方名を包括する表現であることがわかる。この解釈に基づくと、「ツツジの系統」、「ヨウドメの系統」という表現と個別の方名との関係は、図4と図5のように図示化される。

図4：「ツツジの系統」

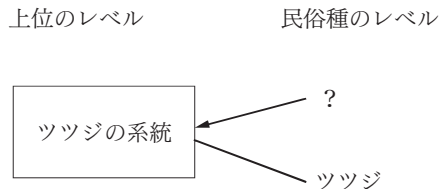


図5：「ヨウドメの系統」

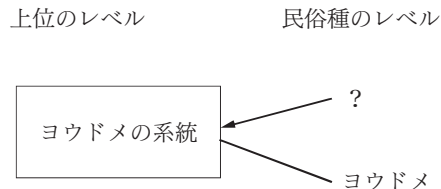


図4と図5からわかるように、民俗種のレベルで個別的な方名がない場合（図では？で示している）もまた、「～の系統」というその上位レベルを呼ぶ表現が使われている。松井健氏も「インフォーマントが標本自体の方名がわからないときには、その標本を含むより上位の、あるいはより広く包括的な方名でこれと呼ぶ」（松井 1989：39）と述べているように、民俗種のレベルに個別の方名がないときは、その上位範疇を呼ぶ表現がよく用いられることがわかる。

ここで「～の系統」の「～」に入りうるものは何か考えてみよう。上のナラ、ツツジ、ヨウドメの3例では、個別的な方名が「～の系統」の「～」に使われている。ここでは「～の系統」という表現は、共通する特徴や性質で複数の種類のものを包括する表現として使われている。よって、「～」には、それら複数のものの共通する特徴を典型的に表している、と下栗の人々が考えている木の方名が選ばれていると考えられる。「～」に当てはまる民俗種がこの3

例以外に何があるか調べることによって、「～の系統」とされる上位範疇を発見することは、残された課題である。

4 「木」の利用法の考察

前章で、マルヤマにどんな木があり、どの木にどんな方名がついているかが明らかになった。本章ではその中からどの木が下栗の人々に利用され、どんな用途に用いられているかを手がかりにして、利用対象としての「木」に関する下栗の民俗的知識を明らかにしたい。第1節で彼らが「利用する木」と「利用しない木」を分類し、第2節では「利用する木」の用途には何があるのかを考察する。

4.1 「利用する木」と「利用しない木」

下栗の人々の木の利用法とそれを支える民俗知識を考察するためには、まず彼らが入手可能な木から、どの木を利用しどの木を利用していないかを調べる必要がある。そこで、3.2の表3にあげた47種のうち、方名の存在をインフォーマントからは確認できなかった1種（ハイノキ科タンナサワフタギ）を除いた46種を「利用する木」と「利用しない木」に分類した（表6と表7参照）。方名が確認できなかった1種は、あとで個別に述べることにする。

「利用する木」と「利用しない木」はそれぞれ以下のように数えられる。

利用する木——46種中42種（方名では44種中40種）

利用しない木——46種中4種（方名では44種中4種）

この数字から、ほとんどの「木」が「利用する木」であると彼らが考えていることがわかる。これらの「木」の利用法とそれを支える民俗的知識を次節で考察し、明らかにしたい。

表6：利用する木46種中42種（方名では44種中40種）

方名	標準和名	科名
アオジ	ウリハタカエデ	カエデ科
アオダコ	ケアオダモ	モクセイ科
オトコヨウドメ・オトコヨウゾメ	ミヤマガマズミ	スイカズラ科
カエデ	ウラゲエンコウカエデ	カエデ科
カシオシミ	ネジキ	ツツジ科
カバノキ	ウダイカンバ	カバノキ科
キンタマズミ	ナツハゼ	ツツジ科
クリ	クリ	ブナ科
クロモンジャ・クロモジ	クロモジ	クスノキ科
ケンプノキ	ケケンポナシ	クロウメモドキ科
コダケ	ヤダケ	イネ科
コハデ	エゴノキ	エゴノキ科
サルグルミ	ツノハシバミ	カバノキ科
サワグルミ	サワグルミ	クルミ科

サワラ	サワラ	ヒノキ科
サンショ	サンショウ	ミカン科
ジシャ	ダンコウバイ	クスノキ科
シデ	アカシデ	カバノキ科
シヨヨズ	ソヨゴ	モチノキ科
スギ	スギ	スギ科
ツガ	ツガ	マツ科
ツツジ	ツリガネツツジ	ツツジ科
ツツジの系統	ミツバツツジ	ツツジ科
ナラ	コナラ	ブナ科
ネズミサシ	ネズミサシ	ヒノキ科
ハチコ	ハチク	イネ科
ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ科
ヒメコ・ヒメコマツ	ゴヨウマツ	マツ科
ビョウブナ	リョウブ	リョウブ科
ボウダラ	ケハリギリ	ウコギ科
マツ	アカマツ	マツ科
マユミ	ツリバナ	ニシキギ科
マンサク	マンサク	マンサク科
ミズナラ	ミズナラ	ブナ科
モウソウダケ	モウソウチク	イネ科
モミ	モミ	マツ科
モミジ	イロハモミジ	カエデ科
モミジ	コハウチワカエデ	カエデ科
モミジ	オオモミジ	カエデ科
ヤマブキ	ヤマブキ	バラ科
ヨウドメ・ヨウゾメ	コバノガマズミ	スイカズラ科
レンゲツツジ・オニツツジ	レンゲツツジ	ツツジ科

表 7：利用しない木 46 種中 4 種（方名では 44 種中 4 種）

方名	標準和名	科名
ウスノキ	ウスノキ	ツツジ科
ヨウドメの系統	オトコヨウドメ	スイカズラ科
ウシゴロシ	カマツカ	バラ科
ズミ	ズミ	バラ科

4.2 木の用途の考察

どの木が利用できるかがわかったところで、次にそれらの用途を考察する。聞き取り調査を通してわかった下栗の人々の木の用途には 1) から 6) の項目があり、1) から 4) は燃料に、5) と 6) は燃料以外に用いられる用途である。

I 燃料

- 1) 「タキギ」
- 2) 「モヤ」
- 3) 「タキツケ」
- 4) 「スミ」

II 燃料以外

- 5) 「用材」
 - a. 「道具」(「柄がら」「槌」「箕」「桶」「棒」「箸」「串」「杖」「くぎ(杭)」「自在鉤」「竿」)
 - b. 「建材」(「柱」「土台」「板」「障子の組子」「梁」「屋根板」「オフラブチ(火堰縁)」)
- 6) 「シイタケ木」

ここで用いている用途の項目名は下栗の人々が呼んでいる名前に従っている。これらの用途の項目を1つずつ定義してみる。これは、下栗の人々の木の用途に何があるかを明らかにすると同時に、下栗の人々による民俗定義を表現する試みである。

用途の項目の定義は、インフォーマントへのインタビューや実物(箸、竿以外のすべて)の直接観察をもとに行っている。それぞれの用途にどんな性質の木が適しているかは、次章で詳しく述べるのでここでは触れない。

I 燃料

1) タキギ

タキギとは、山で切ってきて、そのままくべることができる太さの幹や枝である。太すぎるものは幾つかに割っておく。

2) モヤ

モヤとは、細い幹、枝を山を集め、フジ⁸⁾で束ねた状態のものである。タキギにはならない太さの幹や枝であり、ある程度の量を束ねてタキギと同じようにくべる。

3) タキツケ

タキツケは、火をタキギ、モヤにつけるためのものである。タキツケによってタキギ、モヤの「火のつきをよく」する。枝や幹を使う他の燃料と違い、タキツケは皮や葉がよく使われる。

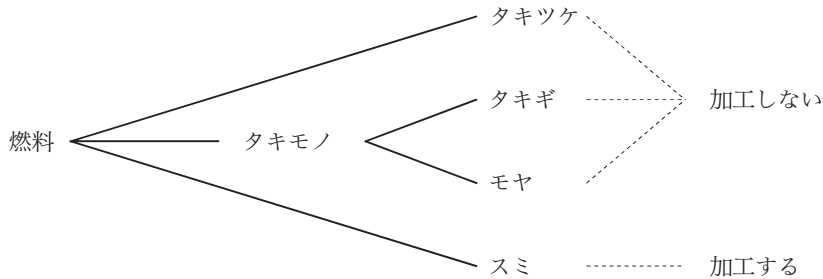
4) スミ

スミは、木炭のことである。自家用につくる場合と売る場合のどちらもあった。家庭での用途は主にいろり、こたつの燃料であった。養蚕をしていた頃は、春と秋には蚕室を暖めるのにも使われた。

図6に注目し、燃料の下位分類について考察してみよう。

燃料に分類されるものにはタキギ、モヤ、スミ、タキツケがあるが、インタビュー中にはそれらの他に「タキモノ」という表現がインフォーマントから度々聞かれた。ここで「タキモノとは何か」と質問をすると、インフォーマントの山崎氏は「焚くものはタキモノである」と答

図6：燃料の下位分類



えた。タキギ、モヤ、スミ、タキツケはそれぞれ「タキモノ」かどうか複数のインフォーマントに確かめたところ、図6に示すように「タキモノ」に該当するのはタキギ、モヤであった。

では一体タキモノとはどんな特徴を持つのだろうか。タキモノに該当するタキギとモヤ以外の燃料であるタキツケとスミの特徴を明らかにすることによって、タキモノの特徴が逆に明らかになるだろう。

まず、タキツケは、他の燃料を燃えさせるきっかけとなるものである。つまりタキツケは、他の燃料とは違い、補助的な役割を果たしている燃料であると言える。実際に料理をしたり暖をとるなどという行為を遂行させることはタキツケだけではできない。一方タキモノはタキツケの火を得て、その火を持続的に燃焼させることによって、料理をしたり暖をとるといった火をおこす目的を果たすことができる。

山にタキギやモヤを採りに行くことを「タキモノ採り」ということから、タキギ、モヤという個々の燃料の名称の上のレベルがタキモノという総称で表されていると考えられる。タキモノという1つの民俗範疇があり、その下にタキギ、モヤがあると仮定できるであろう。

次に、スミもタキギ、モヤと同様、料理をしたり、暖をとるのに使われるが、タキモノとは呼ばれない。タキギ、モヤとちがいで手間のかかる加工を経ており、すでに物質的に木ではないからではないだろうか。

II 燃料以外

5) 用材

「用材」は「道具」と「建材」に分けられる。

a. 道具

「道具」には「柄がら」「槌」「桶」「棒」「箸」「串」「くぎ(杭)」「自在鉤」「竿」があげられた。以下、利用法の観点から具体的に1つずつ解説する。

「柄がら」は鋤の柄のことであり、「槌」は豆や雑穀をたたいて、実を落とすためのものである。「桶」は味噌などを貯蔵するのに使われた。「棒」は、いわゆるすりこぎ棒や豆腐づくりの際に大豆を混ぜるための棒である。「箸」は、日常食事に使う場合がほとんどであるが、葬式で仏様のお膳に供える場合もある。また、山仕事のときに即席で山にある木で箸をつくることもあった。「串」は、ゴヘイモチ、田楽に使う串である。「くぎ」は杭のことである。下栗では

斜面が畑として使われるため、土や作物が下に流れないようにするために丸太などで土止めをする。その土止めのことを「くぎ」という。「自在鉤」は囲炉裏の自在鉤のことである。当時自在鉤は「木」でできていたとインフォーマントは述べているが、調査中に観察することができたのは鉄製であった。

b. 建材

「建材」は家の建築に必要な木材である。「柱」は玄関や床の間に建てられるものである。「板」には壁板、張り板などがある。「屋根板」は屋根を葺く板である。「オフラブチ」とは炉端の周りの枠で、火堰縁の意である。手近にある木でつくったという。

6) シイタケ木

「シイタケ木」はしいたけ菌を植え付けるしいたけの原木のことである。

以上、下栗において利用される木の用途の項目に何があるかを網羅的にあげ、それらの項目の定義を試みたわけだが、利用されてない木にも考察を加える必要がある。以下でそれらの木が利用されない理由を考えてみる。

マルヤマでの調査中、インフォーマントの野牧源吾氏に木を指しながらその方名は何かを聞いたあとで、その燃料としての利用の有無とその理由を聞いた。また、燃料以外の利用の有無とその理由も尋ねた。久保敷氏、野牧年甫氏にも、同じ尋ね方をした。

その結果、燃料としてもそれ以外の用途にも利用されない木であると判断されたのは、

- ズミ（標準和名ズミ）、
- ウスノキ（標準和名ウスノキ）、
- ヨウドメの系統（標準和名オトコヨウゾメ）、
- ウシゴロシ（標準和名カマツカ）

の4種である。ズミとウスノキを利用しない理由は次の通りである。ヨウドメの系統とウシゴロシは燃料に使わない理由も燃料以外にも使わない理由も得られなかった。

・ズミ（和名ズミ）

インフォーマントが使わない理由としてあげたのは、「増えない」、「バラがある」である。「増えない」というのは木の数が増えないという意味である。「バラがある」のバラとは下栗方言で刺という意味である。タキギやモヤにする場合、刺があると束ねにくく使いにくいから、と解釈できる。

・ウスノキ（和名ウスノキ）

「1メートルくらいの高さにしかならない」というコメントから、木が大きくならず、タキギ、スミに活用できない、ということが読みとれる。また、すぐ枯れるため、モヤにも他の用途にも使えないと解釈できる。

また、ある1人のインフォーマントは「燃料は、燃えればいいので「木」の種類はなんでもいい」と述べている。つまり、タキギやモヤなどの燃料としての「木」の利用は、種を選ばず、

すべての木が「利用する木」であるといえるので、47種すべてが「利用する木」となるはずである。

それにもかかわらず、上であげた4種が「利用しない木」であるのは、燃料として適していない「木」であるからと言える。なぜならば、「増えない」、「大きくならない」ためにわざわざ燃料として採らない、また「バラがある」ために束ねにくく燃料としても使いづらいからである。要するに、燃料として利用できない「木」が「利用しない木」である。

この章で最初に触れた、下栗での方名の存在が確認できなかった1種について、方名があるものと別にしてここで述べておくことにする。それはマルヤマで観察することができた木だが、源吾氏はその方名がわからなかった。浅野氏の同定によると、その標準和名はタンナサワフタギ（ハイノキ科）である。そのとき、「タキギやスミには使わないが、杖には非常にいい」と源吾氏は述べた。その後、久保敷氏、野牧年甫氏に写真（浅野・伊知地 1987）を見てもらいながらその特徴を言ってみたが、方名も利用法もわからなかった。よって、ここでは、方名が複数のインフォーマントに知られているものと同列に扱うことは避けた。なぜなら、偶然他のインフォーマントが知らなかったものなのか、下栗では一般的に知られていないものであるのかを確認できないからである。

次の章では、この章で「利用する木」に分類した42種が、先にあげた用途の項目のどれに使われていたのかを考察する。

5 用途別の木の利用とその利用程度

前章では、どの木が利用されており、どの木が利用されていないかを分類したあとで、用途別の項目を網羅的にあげ、その定義を行った。本章では、木の用途に焦点をあて考察してみる。どの木がどんな理由で、どんな用途に選ばれ、どの程度使われているかを考察することによって、木の性質と利用に関する彼らの知識を明らかにしたい。

5.1 用途別の利用程度

本節では、前章であげた用途ごとに42種の木の利用程度を◎○△の3段階のランクで表した。この3段階のランク付けは、3.1で述べたインタビューにおけるインフォーマントとのやりとりから得られたコメントにしたがって、筆者が判断した。◎○△の定義は以下の通りである。

「よく使う」 ◎⁹⁾

「使う」 ○

「使うが、良くない」「ほとんど使わない」 △

「よく使う」は積極的な利用であり、評価も肯定的である。「使う」は積極的な利用をしているが、評価はあまり肯定的ではない。「使うが、良くない」「ほとんど使わない」は利用に消極的で、どちらかという人评价は否定的である。

42種を対象に、21種の用途別に分け、どの用途にどんな「木」が使われているかを調べた。そして、◎○△の3段階でランク付けした結果を◎○△の順で用途別に並べた。本節では、表

8に用途別に何種の「木」がどの程度選ばれているかのみを示し、どの「木」がどの程度選ばれているかは付録に載せた。また、◎○△の3段階のランクがつけられた「木」の種数が多い用途のランキングを示したものが表9である。

表8：用途別の「木」の種数とその利用程度

用途		◎	○	△	合計
燃料	タキギ	5	12	5	22
	モヤ	4	9	14	27
	タキツケ	1	4	1	6
	スミ	5	12	2	19
用材 (道具)	柄がら	1	2	0	3
	槌	0	1	0	1
	箕	1	1	0	2
	棒	0	1	0	1
	鈎	1	0	0	1
	くぎ(杭)	0	1	0	1
	物干し竿	1	0	0	1
	桶	1	0	0	1
	箸	0	2	0	2
用材 (建材)	串	0	2	1	3
	柱	2	2	0	4
	土台	1	0	0	1
	板	2	1	1	4
	梁	1	0	0	1
	障子の組子	1	0	0	1
	屋根板	1	1	0	2
シイタケ木		2	0	2	4

表9：合計数順に見た「木」の用途

種数	「木」の用途
27種	モヤ
22種	タキギ
19種	スミ
6種	タキツケ
4種	板、柱、シイタケ木
3種	柄がら、串
2種	箕、箸、屋根板
1種	槌、棒、鈎、くぎ(杭)、物干し竿、桶、土台、梁、障子の組子

表8と表9は各用途に何種の木がどの程度好んで用いられるかを表しているが、さらに、各用途に好んで利用される「木」の典型的特徴を抽出しながら、表8と表9で表される下栗の人々による各用途の木の種数や利用程度に作用する要因を考察してみる。各用途に好んで利用される「木」の典型的特徴は、インタビューでのインフォーマントとのやりとりから得られたものである。

I 燃料として選ぶ理由

〈タキギ〉 「火強い」「堅い」「燃えがいい」「太い」

〈モヤ〉 「火強い」「堅い」「燃えがいい」

〈タキツケ〉 「火のつきがいい」「よく燃える」「脂が多い」

表8と表9が示すように、タキギとモヤは選ばれる木の種数が他のどの用途項目よりも多いことがわかる（タキギ22種、モヤ27種）。利用程度が下がるほど、つまり◎から○、△へ評価が低くなるほど、その用途に彼らが選ぶ理由として上記のような典型的特徴を述べるインフォーマントのコメントは少なくなる。タキギとモヤに選ぶ典型的な理由、つまりそれら2つの用途の利用に適した条件が少なくなるにもかかわらず、タキギ・モヤとして使われる木が多いのは、タキギ・モヤの持つ性格によるのではないだろうか。つまり、タキギ・モヤは燃料として燃えればよいという彼らの考えが、選ばれる種の多さに反映されていると解釈できる。

一方、表8からわかるように、タキツケに「利用する木」として選ばれている種が少ない（6種）のは、次のような理由によるのではないだろうか。

タキツケの役割はタキギ、モヤに火を移すことであるから、タキギ、モヤにくらべてタキツケ自身がただ燃えればよいというだけではいけない。つまり彼らが「利用する木」として選ぶ種はタキツケとして十分役割を果たすと評価しているものだけである。また、タキツケは他の燃料とくらべて消費の量が少ないために、用途に適した種だけを選んでも十分足りるのではないだろうか。よって選ばれている種が少ないのではないだろうか。

タキギ、モヤはタキモノという総称で表されていることから、共通の特徴を持っていると考えられる。それが「火強い」「堅い」「燃えがいい」である。タキギは、それに加えて「太い」という形態的特徴を持っている。一方、モヤにはタキギにするほど太くならない種が選ばれたり、タキギに好んで選ばれる種であってもまだ太くならない枝が複数束ねられて利用される。

次は、スミの典型的特徴である。

〈スミ〉 「火強い」「堅い」「太い」「まっすぐである」

炭という用途に選ばれる木の種類は、表8に見られるように他の燃料にくらべて少ない。「火強い」「堅い」という特徴はタキギと共通しているが、炭にはさらに「太い」「まっすぐである」という特徴が加わる。炭はタキギなどとは違い、加工を必要とするからである。インフォーマントの言葉を借りて具体的に表現すると、炭は加工に耐えうるある程度の太さと、火の通りを均一にさせ一度に多くの炭を加工するためのまっすぐさが要求され、売りに出す場合はなおさらである。

炭として最も良質と言われるのはナラ（標準和名 コナラ）からできたものであり、「ナラ

ズミ」と言われる。「ナラズミ」が一番良質であることは、ナラ以外からつくる炭を「ザツズミ」と呼んで、「ナラズミ」と区別することからもわかる。

次に、燃料以外の用途に選ぶ理由について述べる。

II 燃料以外の用途に選ぶ理由

《用材》

〈道具〉

柄がら	「折れない」「しなる」「すべりにくい」
箕	「『ひる』 ¹⁰⁾ のに調子がいい」
桶	「腐らない」
棒	「保ちがよくて減らない」
くぎ(杭)	「腐りにくい」

〈建材〉

柱	「木が腐りにくい」「木肌がきれい」「丈夫」「かたい」
土台	「木が腐りにくい」
板	「木目がきれい」
障子の組子	「木肌が白い」「柔らかい」
梁	「大木である」
屋根板	「腐りにくい」

表8と表9が示すように、用材としての利用は燃料よりも選ばれている種が少なく、○△(つまり評価があまり肯定的でない)と筆者が判断した木の種類も少ない。この事実から、利用する際の彼らの木に対する好みを次のように解釈できる。

タキギ・モヤは、期待される条件(火保ちがいいなど)があるにもかかわらず、その条件をあまり満たしていない種も選ばれていた。用材は、一度きりの利用でなくなってしまう燃料とは違い、半永続的に使う。長く使うためには、用途に最も適した木を選ぶ必要がある。そのため、燃料とは違い、上記にあげられた典型的特徴の欠けているものを選ぶことはできない、という考え方が作用していると考えられる。

次は、シイタケ木の典型的特徴である。

〈シイタケ木〉「皮が厚い」「良い質のしいたけが生える」「保ちがいい」

表8からわかる通り、シイタケ木に利用される木は4種に限られる。皮が薄いと保ちが悪く、たとえば、ナラは5年保つが、それにくらべて皮が薄いクリ、シデは約3年しか保たない。

5.2 「木」の民俗種別に見た用途の数

前節では、21種類の用途にそれぞれ選ばれる木の種(species)数を利用程度別に示し、各用途に好んで選ばれる理由、すなわち選ばれる木の典型的特徴を考察した。本節では、用途の数が多く、利用程度の高い木(民俗種)にはどのようなものがあるのかを考察し、下栗の人々が万能と考える「木」が何かを明らかにする。木の民俗種別に用途の数を調べ、表10に示した。

表10：木の民俗種別に見た用途の数

用途数	民俗種数	民俗種名
9 用途	1 種	クリ
4 用途	7 種	アオダコ, サワラ, ジシャ, シデ, ナラ, マツ, ツガ
3 用途	12 種	アオジ, カバノキ, クロモンジャ・クロモジ, サワグルミ, スギ, マユミ, ミズナラ, ヒノキ, モミジ, カエデ, コハデ, ビョウブナ
2 用途	7 種	ショヨズ, ネズミサシ, ヒメコ, マンサク, ヨウドメ・ヨウゾメ, サルグルミ, コダケ
1 用途	13 種	オトコヨウドメ・オトコヨウゾメ, キンタマズミ, ケンプノキ, サンショ, ツツジ, ツツジの系統, ハチコ, ボウダラ, モウソウダケ, モミ, ヤマブキ, レンゲツツジ・オニツツジ

表10が示すように、単一の用途しかないものが13種（民俗種）あり、複数の用途を持つものが27種（民俗種）ある。単一の用途しかないものと複数の用途があるものの数を比較すると、約1対2の割合である。この割合から、多くの「木」が用途に多様性があることがわかる。

単一の用途しかないもの13種（民俗種）の約3分の1にあたる5種（民俗種）、サンショ、ハチコ、ボウダラ、モウソウダケ、ヤマブキは第1節で述べた利用程度に照らし合わせてみると、積極的な利用（◎○）がされていることがわかる（付録II参照）。しかし残りの8種は肯定的な評価をされていない（△）が「利用する木」としてあげられたものである。

複数の用途に用いられるものは、少なくとも1つ以上の用途には積極的に用いられ、肯定的な評価をされている（◎）ものがほとんどである。また、複数の用途に用いられるものの中で、クリは最も用途数が多く（9用途）、かつどの用途にも積極的な利用（◎○）がされていることから、非常に万能な「木」であると下栗の人々に考えられていることがわかる。

5.3「カナギ」という概念

第1節で、用途別の利用程度と、それぞれの用途に選ばれる典型的理由を抽出した。第2節では、民俗種別に用途の数を数え、複数の用途に使われる民俗種が約3分の2を占めていることから、多くの「木」が用途に多様性があることがわかった。ここでは、燃料としての利用に非常に関連性が高い概念について触れておく。

インタビューを行う過程で、下栗の人々の木に関する知識である「カナギ」という民俗カテゴリーを発見した。これは下栗の人々が持っている共通した木の性質をとらえる概念である。「カナギ」とはどのような概念なのであろうか。

インタビューのなかで、タキギ、モヤ、スミなどの燃料として利用する理由として「カナギだから」という答えをすべてのインフォーマントから聞くことができた。「カナギ」とは何であるかという質問に対し、すべてのインフォーマントから「鉄のように堅い木である」、「広葉樹であり、燃料として火保ちがいい」という説明が得られた。どの木が「カナギ」であるかと彼らに質問すると、ナラ、クリ、カエデ（方名）という具体的な木の名前がすべてのインフォーマントから得られた。

「カナギ」としてあげられたナラ・クリ・カエデは、燃料以外に用材やシイタケ木としても

利用される。しかし、用材やシイタケ木の用途に利用する理由には「カナギだから」という答えは出てこなかった。

したがって、「カナギ」という概念は、燃料に適した種を表す概念と考えることができる。この概念は利用法別に「木」を見ていくことによって初めて明らかにすることができる概念である。

む す び

前章までに、山地帯における典型的な自然林であるマルヤマと、下栗で代表的な相観であるミズナラ林の植生を植物社会学的に明らかにした上で、そのような下栗の人々をとりまく環境で、彼らがどのような木を採取し、それらをどのような理由で、どのような用途に、どの程度の頻度で用いたのかという彼らの木の利用に関する民俗的知識を明らかにした。

ただし、本稿で扱った「木の利用」は、マルヤマのような自然林のみを調査対象としており、二次林であるミズナラ林を対象としていない。したがって、本稿で明らかにした木の利用に関する民俗的知識は部分的なものであり、下栗における木の利用に関する民俗的知識と呼ぶには不十分なものであったと言える。つまり、自然林だけでなく、ミズナラ林をも考察対象とすることによって初めて、下栗の人々が持つ木の利用に関する民俗的知識の全体像が明らかになる。ミズナラ林を対象とした民俗的知識を探る調査・分析は、今後の課題である。

また、林のどこにどのような木があるかという植生に関する下栗の人々の知識と、どこまで木を採りに行っていたかという林の利用範囲も今後調査すべき課題である。これらを調べることによって、彼らの木の利用に関する重層的な知識がより一層明らかになるだろう。

注

- 1) 草稿的論考は、須田・原 (1997)、須田・原 (1998) として報告してある。
- 2) 果実がないので、種の同定はできなかったが、スゲ属の一種である。
- 3) タキギ、タキツケ、モヤ、炭、くぎ (杭)、柱、土台、屋根板、シイタケ木の9用途ある。
- 4) 下栗では斜面に畑があるので、土や作物が下に流れないようにするために、丸太などで土止めをする。その土止めのことをくぎ (杭) と呼ぶ。
- 5) 特に「素性の良い (まっすぐ伸びている)」クリの木は必要に応じて用材として使ったり、良くない実になるクリはタキギにしてしまうことがあった。
- 6) 宮脇 (1967) によると、ミズナラ、クリ、ヤマウルシ、ヤマモミジ、イヌツゲ、アオハダの6種である。
- 7) インフォーマントから聞いた方名を手がかりにして、その方名の植物の候補を浅野氏にあげていただき、浅野・伊知地 (1987) の写真でインフォーマントに再度確認した。
- 8) 「フジ」とは、束ね、縛る道具として用いられるフジ性の植物のことである。詳しくは磯崎 (1996: 3) を参照。
- 9) 複数の用途で◎のついたナラ、ミズナラは燃料とシイタケ木に利用されている。いずれの用途にも適していると評価され、積極的に利用されている。しかし実際には優先順位がある。シイタケが生えるシイタケ木と炭は商品価値があり、お金になるので、モヤやタキギよりも優先されることが多い。

原 真由子

10)「ひる」とは、箕を使ってごみや作物の皮を取り除くための作業である。

参考文献

- 浅野一男・伊知地国夫，1987『伊那谷の植物』信濃毎日新聞社
浅野一男，1991『浪合村の植物』浪合村
浅野一男，1992『天龍村の植物』天龍村教育委員会
磯崎俊彦，1996「下栗地区におけるつる性植物の利用」東京外国語大学記述言語学ゼミ編『下栗
報告書1995』東京外国語大学中川裕研究室
後藤総一郎，1995『遠山物語』ちくま学芸文庫
鈴木時夫，1949「天龍川上流の温帯林植生に就いて」『技術研究』東京営林局
須田和代・原真由子，1997「下栗における木の利用—1940年から1960年まで—」東京外国語大学
記述言語学ゼミ編『下栗報告書1996』東京外国語大学中川裕研究室
須田和代・原真由子，1998「下栗の林の再構成」東京外国語大学記述言語学ゼミ編『下栗報告書
1997』東京外国語大学中川裕研究室
松井健，1989『琉球のニュー・エスノグラフィー』人文書院
宮脇昭責任編集，1967『原色現代科学大事典3 植物』学研

付録 I

マルヤマ（モミツガ林・モミクリ林）、ミズナラ林1、ミズナラ林2、それぞれ4地点の林の組成種の標準和名を五十音順に並べ、下栗の方名がわかる場合はそれを隣の欄にあげた。また、このうち標本を作製したものが38種あり（標本番号は東京外国語大学中川研究室で用いている整理番号である）、信州大学のハーバリウムに保管する予定である。標本の採集日はすべて1997年6月21日であり、それらの種の同定は浅野一男氏による。

付録1：マルヤマ（モミツガ林）の組成種一覧

標準和名	科名	下栗の方名	標本番号
1 アクシバ	ツツジ科		TUFS 81
2 イタヤカエデ	カエデ科		
3 イヌシデ	カバノキ科	シデ	TUFS 85
4 ウスノキ	ツツジ科	ウスノキ	
5 ウスバサイシン	ウマノスズクサ科		
6 ウラジロモミ	マツ科	ウラジロ	TUFS 93
7 ウリカエデ	カエデ科		
8 ウリハダカエデ	カエデ科	アオジ	TUFS 72
9 ウワミズザクラ	バラ科		TUFS 87
10 エゴノキ	エゴノキ科	コハデ	
11 オオナルコユリ	ユリ科		TUFS 71
12 オシダ	オシダ科		
13 オトコヨウゾメ	スイカズラ科	オトコヨウドメ	
14 カスミザクラ	バラ科		
15 クリ	ブナ科	クリ	
16 クロモジ	クスノキ科	クロモンジャ	
17 ケハリギリ	ウコギ科	ボウダラ	TUFS 69
18 コアジサイ	ユキノシタ科		
19 コシアブラ	ウコギ科		
20 ゴヨウマツ	マツ科	ヒメコ	
21 シシガシラ	ウラボシ科		
22 シノブカグマ	ウラボシ科		
23 ズミ	バラ科	ズミ	
24	ソヨゴ	モチノキ科	ショヨズ
25 タンナサワフタギ	ハイノキ科		TUFS 70
26 チゴユリ	ユリ科		
27 ツガ	マツ科	ツガ	
28 ツノハシバミ	カバノキ科	サルグルミ	
29 ツリガネツツジ	ツツジ科	ツツジ	
30 ツリバナ	ニシキギ科	マユミ	
31 ツルウメモドキ	ニシキギ科		
32 ツルマサキ	ニシキギ科		
33 ナガオノキシノブ	ウラボシ科		

原 真由子

34	ヒノキ	ヒノキ科	ヒノキ	
35	ヒメノキシノブ	ウラボシ科		
36	フクオウソウ	キク科		
37	ヘビノネゴザ	ウラボシ科		
38	マムシグサ	サトイモ科		
39	マルバノイチヤクソウ	イチヤクソウ科		
40	ミズナラ	ブナ科	ミズナラ	
41	ミツバツツジ	ツツジ科		
42	ミヤマガマズミ	スイカズラ科	オトコヨウゾメ・ヨウドメ	TUFS 65
43	モミ	マツ科	モミ・ホンモミ	
44	モミジイチゴ	バラ科	ササイチゴ	
45	ヤマカシユウ	ユリ科		TUFS 66
46	ヤマウルシ	ウルシ科	ヤマウルシ	TUFS 97
47	リョウブ	リョウブ科	ビョウブナ	
48	レンゲツツジ	ツツジ科	レンゲツツジ	

付録2：マルヤマ（モミクリ林）の組成種一覧

	標準和名	科名	下栗の方名	標本番号
1	アオスズラン	ラン科		
2	アキノキリンソウ	キク科		
3	アケビ	アケビ科		
4	アズキナシ	バラ科		
5	イワガラミ	ユキノシタ科		
6	ウスノキ	ツツジ科	ウスノキ	
7	ウスバサイシン	ウマノスズクサ科		
8	ウツギ	ユキノシタ科	ウツギ	
9	ウド	ウコギ科		
10	ウラゲエンコウカエデ	カエデ科	カエデ	
11	ウラジロモミ	マツ科	ウラジロ	
12	ウワミズザクラ	バラ科		
13	エゴノキ	エゴノキ科	コハデ	
14	オオカモメヅル	ガガイモ科		
15	オシダ	オシダ科		
16	カスミザクラ	バラ科		
17	クリ	ブナ科	クリ	
18	クロモジ	クスノキ科	クロモンジャ	
19	ケハリギ	ウコギ科	ボウダラ	TUFS 69
20	コアジサイ	ユキノシタ科		
21	コマユミ	ニシキギ科	マユミ	TUFS 79
22	サルトリイバラ	ユリ科		
23	シオジ	モクセイ科		
24	シオデ	ユリ科		
25	シノブカグマ	ウラボシ科		
26	スイカズラ	スイカズラ科		
27	ズミ	バラ科	ズミ	

28	ソヨゴ	モチノキ科	ショヨブ	
29	タチドコロ	ヤマノイモ科	トコロ	TUFS 95
30	タラノキ	ウコギ科		
31	ダンコウバイ	クスノキ科	ジシャ	
32	タンナサワフタギ	ハイノキ科		
33	チゴユリ	ユリ科		
34	ツルニンジン	キキョウ科		
35	ツルマサキ	ニシキギ科		
36	ナンキンナナカマド	バラ科	ナナカマド	TUFS 90
37	ニガイチゴ	バラ科	アズキイチゴ	
38	ニワトコ	スイカズラ科		
39	ノリウツギ	ユキノシタ科		
40	ヒメノキシブ	ウラボシ科		
41	ヒメマイヅルソウ	ユリ科		TUFS 73
42	フクオウソウ	キク科		
43	ヘビノネゴザ	ウラボシ科		
44	マムシグサ	サトイモ科		
45	ミズナラ	ブナ科	ミズナラ	
46	ミツバアケビ	アケビ科		
47	ミヤマガマズミ	スイカズラ科	オトコヨウゾメ・ヨウドメ	TUFS 65
48	ミヤマザクラ	バラ科		TUFS 84
49	モミ	マツ科	モミ・ホンモミ	TUFS 92
50	モミジイチゴ	バラ科	ササイチゴ	
51	ヤマウルシ	ウルシ科	ヤマウルシ	
52	レンゲツツジ	ツツジ科	レンゲツツジ	

付録3：ミズナラ林1の組成種一覧

標準和名	科名	下栗の和名	標本番号
1 アオハダ	モチノキ科		
2 アキノキリンソウ	キク科		
3 イタドリ	タデ科		
4 イヌシデ	カバノキ科	シデ	TUFS 108
5 ウツギ	ユキノシタ科	ウツギ	TUFS 82
6 ウリカエデ	カエデ科		
7 ウリハダカエデ	カエデ科	アオジ	
8 エゴノキ	エゴノキ科	コハデ	TUFS 107
9 オカトラノオ	サクラソウ科		
10 オトコエシ	オミナエシ科		
11 オトコヨウゾメ	スイカズラ科	オトコヨウドメ	TUFS 88
12 オニイタヤ	カエデ科		
13 カスミザクラ	バラ科		
14 クリ	ブナ科	クリ	
15 コアジサイ	ユキノシタ科	TUFS 76	
16 コシアブラ	ウコギ科		

原 真由子

17	コハウチワカエデ	カエデ科	モミジ	TUFS 102
18	コバノトネリコ	モクセイ科	アオダコ	TUFS 75
19	コマユミ	ニシキギ科	マユミ	
20	ゴヨウマツ	マツ科	ヒメコ	TUFS 101
21	ズミ	バラ科	ズミ	
22	タガネソウ	カヤツリグサ科		
23	タラノキ	ウコギ科	TUFS 67	
24	ダンコウバイ	クスノキ科	ジシャ	TUFS 68
25	ツガ	マツ科	ツガ	
26	ツノハシバミ	カバノキ科	サルグルミ	TUFS 103
27	ツリガネツツジ	ツツジ科	ツツジ	TUFS 78
28	ヌルデ	ウルシ科	ヌルデ	TUFS 91
29	ノブドウ	ブドウ科		
30	ノリウツギ	ユキノシタ科		
31	フジ	マメ科	TUFS 74	
32	ベニバナイチヤクソウ	イチヤクソウ科		
33	ヘビノネゴザ	ウラボシ科	TUFS 80	
34	ミズナラ	ブナ科	ミズナラ	
35	ミヤマガマズミ	スイカズラ科	オトコヨウドメ・ヨウゾメ	TUFS 98
36	モチツツジ	ツツジ科	ツツジ	TUFS 83
37	ヤマウルシ	ウルシ科	ヤマウルシ	
38	ヤマハギ	マメ科	ハギ	TUFS 89
39	ヨモギ	キク科		
40	リョウブ	リョウブ科	ビョウブナ	TUFS 96
41	レンゲツツジ	ツツジ科	レンゲツツジ	TUFS 104
42	ワラビ	イノモトソウ科	ワラビ	TUFS 105

付録4：ミズナラ林2の組成種一覧

	標準和名	科名	下栗の方名	標本番号
1	アオハダ	モチノキ科		
2	アカシデ	カバノキ科		
3	イタドリ	タデ科		
4	イヌシデ	カバノキ科	シデ	
5	イワガラミ	ユキノシタ科		
6	ウスノキ	ツツジ科	ウスノキ	
7	ウダイカンバ	カバノキ科	カバノキ	
8	ウリカエデ	カエデ科		
9	エゴノキ	エゴノキ科	コハデ	
10	オトコヨウゾメ	スイカズラ科	オトコヨウドメ	
11	カマツカ	バラ科	ウシゴロシ	TUFS 99
12	クリ	ブナ科	クリ	
13	クロモジ	クスノキ科	クロモンジャ	TUFS 106
14	コシアブラ	ウコギ科		
15	コバノトネリコ	モクセイ科	アオダコ	
16	ゴヨウマツ	マツ科	ヒメコ	

17	タガネソウ	カヤツリグサ科	
18	タラノキ	ウコギ科	
19	ダンコウバイ	クスノキ科	ジシャ
20	タンナサワフタギ	ハイノキ科	
21	ツガ	マツ科	ツガ
22	ツノハシバミ	カバノキ科	サルグルミ
23	ニシキウツギ	スイカズラ科	
24	ヘビノネゴザ	ウラボシ科	
25	マンサク	マンサク科	マンサク
26	ミズナラ	ブナ科	ミズナラ
27	ミヤマガマズミ	スイカズラ科	オトコヨウドメ・ヨウゾメ
28	モチツツジ	ツツジ科	ツツジ
29	ヤマウルシ	ウルシ科	ヤマウルシ
30	リョウブ	リョウブ科	ビョウブナ

付録II：「利用する木の用途別の利用程度」

用途ごとにその利用程度を◎○△の3段階のランクで表した。

◎○△の定義は以下の通りである。

- 「よく使う」 ◎ 積極的な利用であり、評価も肯定的である。
「使う」 ○ 積極的な利用をしているが、評価はあまり肯定的ではない。
「使うが、よくない」 △ 利用に消極的で、どちらかという人评价は否定的である。
「ほとんど使わない」

I 燃料

1) タキギ

	方名	科名	和名
◎	カエデ	カエデ科	ウラゲエンコウカエデ
	ナラ	ブナ科	コナラ
	サルグルミ	カバノキ科	ツノハシバミ
	ミズナラ	ブナ科	ミズナラ
	ビョウブナ	リョウブ科	リョウブ
○	アオジ	カエデ科	ウリハダカエデ
	アオダモ	モクセイ科	ケアオダモ
	カシオシミ・アカンボウ	ツツジ科	ネジキ
	カバノキ	カバノキ科	ウダイカンバ
	コハデ	エゴノキ科	エゴノキ
	ジシャ	クスノキ科	ダンコウバイ
	シデ	カバノキ科	アカシデ
	マユミ	ニシキギ科	ツリバナ
	マンサク	マンサク科	マンサク
	モミジ	カエデ科	イロハモミジ
		カエデ科	コハウチワカエデ
		カエデ科	オオモミジ

原 真由子

△ クリ
ツガ
ヒノキ
マツ
ヨウドメ・ヨウゾメ

ブナ科
マツ科
ヒノキ科
マツ科
スイカズラ科

クリ
ツガ
ヒノキ
アカマツ
コバノガマズミ

2) モヤ

◎ カエデ
クロモンジャ・クロモジ
ナラ
ジシャ

カエデ科
クスノキ科
ブナ科
クスノキ科

ウラゲエンコウカエデ
クロモジ
コナラ
ダンコウバイ

○ アオジ
アオダコ
オトコヨウドメ・オトコヨウゾメ
カバノキ
コハデ
ケンブノキ
シデ
ショヨブ
マユミ

カエデ科
モクセイ科
スイカズラ科
カバノキ科
エゴノキ科
クロウメモドキ科
カバノキ科
モチノキ科
ニシキギ科

ウリハダカエデ
ケアオダモ
ミヤマガマズミ
ウダイカンバ
エゴノキ
ケケンボナシ
アカシデ
ソヨゴ
ツリバナ

△ キンタマズミ
クリ
スギ
ツガ
ツツジ
ツツジの系統
ヒノキ
ビョウブナ
マツ
モミジ

ヨウドメ・ヨウゾメ
レンゲツツジ・オニツツジ

ツツジ科
ブナ科
スギ科
マツ科
ツツジ科
ツツジ科
ヒノキ科
リョウブ科
マツ科
カエデ科
カエデ科
カエデ科
スイカズラ科
ツツジ科

ナツハゼ
クリ
スギ
ツガ
ツリガネツツジ
ミツバツツジ
ヒノキ
リョウブ
アカマツ
イロハモミジ
オオモミジ
コハウチワカエデ
コバノガマズミ
レンゲツツジ

3) タキツケ

◎ マツ
カバノキ
クロモンジャ・クロモジ
スギ
ジシャ

マツ科
カバノキ科
クスノキ科
スギ科
クスノキ科

アカマツ
ウダイカンバ
クロモジ
スギ
ダンコウバイ

△ クリ

ブナ科

クリ

4) スミ

◎	アオダコ	モクセイ科	ケアオダモ
	サルグルミ	カバノキ科	ツノハシバミ
	ナラ	ブナ科	コナラ
	ビョウブナ	リョウブ科	リョウブ
	ミズナラ	ブナ科	ミズナラ
○	アオジ	カエデ科	ウリハダカエデ
	カエデ	カエデ科	ウラゲエンコウカエデ
	カシオシミ・アカンボウ	ツツジ科	ネジキ
	ジシャ	クスノキ科	ダンコウバイ
	シデ	カバノキ科	アカシデ
	ショヨズ	モチノキ科	ソヨゴ
	スギ	スギ科	スギ
	マユミ	ニシキギ科	ツリバナ
	マンサク	マンサク科	マンサク
	モミジ	カエデ科	イロハモミジ
		カエデ科	コハウチワカエデ
		カエデ科	オオモミジ
△	クリ	ブナ科	クリ
	コハデ	エゴノキ科	エゴノキ

II 燃料以外

5) 用材

a. 道具

柄がら

◎	アオダコ	モクセイ科	ケアオダモ
	サワグルミ	クルミ科	サワグルミ
	カシオシミ・アカンボウ	ツツジ科	ネジキ

槌

○	ヒノキ	ヒノキ科	ヒノキ
---	-----	------	-----

箕

◎	サワグルミ	クルミ科	サワグルミ
○	ネズミサシ	ヒノキ科	ネズミサシ

棒

○	サンショ	ミカン科	サンショ
---	------	------	------

鉤

◎	モウソウダケ	イネ科	モウソウチク
---	--------	-----	--------

原 真由子

くぎ (杭)

○	クリ	ブナ科	クリ
---	----	-----	----

物干し竿

◎	ハチコ	イネ科	ハチク
---	-----	-----	-----

桶

◎	サワラ	ヒノキ科	サワラ
---	-----	------	-----

箸

○	サワラ	ヒノキ科	サワラ
	コダケ	イネ科	ヤダケ
	ヤマブキ	バラ科	ヤマブキ

串

○	コダケ	イネ科	ヤダケ
	サワラ	ヒノキ科	サワラ
△	クロモンジャ・クロモジ	クスノキ科	クロモジ

柱

◎	クリ	ブナ科	クリ
	ツガ	マツ科	ツガ
○	ボウダラ	ウコギ科	ケハリギリ
	ネズミサシ	ヒノキ科	ネズミサシ

土台

◎	クリ	ブナ科	クリ
---	----	-----	----

板

◎	ツガ	マツ科	ツガ
	ヒメコ	マツ科	ゴヨウマツ
○	サワグルミ	クルミ科	サワグルミ
△	モミ	マツ科	モミ

梁

◎	マツ	マツ科	アカマツ
---	----	-----	------

障子の組子

◎	ヒメコ	マツ科	ゴヨウマツ
---	-----	-----	-------

屋根板

- ◎ クリ
- サワラ

- ブナ科 クリ
- ヒノキ科 サワラ

6) シイタケ木

- ◎ ナラ
- ミズナラ
- △ シデ
- クリ

- ブナ科 コナラ
- ブナ科 ミズナラ
- カバノキ科 アカシデ
- ブナ科 クリ